

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4370400600		
法人名	医療社団法人聖和会		
事業所名	グリーンライフヴィラ荒尾		
所在地	熊本県荒尾市本井手1480-26		
自己評価作成日	令和5年 11月 5日	評価結果市町村報告日	令和6年 1月 15日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> ・入居者が、施設に入居することにより、何かを強いられたり、圧迫感を感じる事がなく、自分のペースでゆったりとした生活を送ることができる。 ・定期的な行事や、地域の催し物に参加する機会があり、入居以前の暮らしに近い生活を継続できるような支援を提供できる。 ・敷地、建物は十分な面積があり、廊下やリビングは広々としており、開放的で穏やかな雰囲気がある。 ・同一敷地内に併設してある小規模多機能施設とは綿密な連携を取っており、そこで行われる様々な慰問等の催し物に参加できる。かつ、ホーム内で阻害感を感じたり、不穏等で環境の変化が必要な際に、逃避先としての居場所にも活用できる。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>日々の入居者の生活は何も制限することなく、訪問時も食堂や居室を行き来したり、自由に思い思いの時間を過ごす様子を見ることができました。日頃のケアでは理念に基づいた年間目標、月間目標が定められ、取組まれています。年間目標は生活の面と家族と入居者を繋ぐ面の2つの視点から考えられており、月間目標とともに毎月の職員会議で振り返りを行い、新たに翌月に向かう様子がルーティン化されています。毎月の会議では主任は事前に職員の意見を集め、会議の冒頭では主任の思いも表されており、スタッフ皆で積極的に主体的に業務に取り組む様子があります。入居者に対しては「できる力を信じ」、何かをしてもらうだけに着目せず、ADLや会話等、入居者一人ひとり個人を尊重したケアを行うことを共有されていました。</p>
--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 九州評価機構
所在地	熊本市中央区神水2丁目5番22号
訪問調査日	令和5年12月5日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎年度、事業所理念に基づいた年度目標を掲げている。また、毎月スタッフミーティングで決定される月間目標はその年度目標に則したものが挙げられるようになっている。	理念に基づき職員間で意見を出し合い定めた年間目標、毎月の月間目標は、毎月の職員会議で振り返りの時間を設けている。今年度は生活面・家族と入居者を繋ぐ面の2つが掲げられている。年間計画を策定する際には主任から理念の説明もしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	管理者が定期的に地域住民や、代表者、地域在住の入居者家族を訪問し、関係作りを行っている。また、地域行事への協賛など法人を通して行っているが、職員個々での交流は少ない。	従来より管理者が地域を訪問し、関係作りを行っている。法人も地域行事等への協賛を行っている。現状はコロナ禍が続いたことに加え地域の高齢化も進み、事業所・入居者と地域の日常的な交流は難しい状況となっている。入居者の近隣の散歩も再開し、家族との関わり支援は継続している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	近所で認知症のある人やその家族困っている際の相談窓口は常時開放しているが、受身であることは否めない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議ではアットホームな雰囲気作りに成功しており、地域住民代表や行政職員から、様々な意見が気軽に出来るようになっている。	コロナの5類移行後、今年度は対面での開催ができるようになった。日々の入居者の生活の様子に加え職員による研修や取り組み状況も報告し、身体拘束適正化検討委員会の報告も行っている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	コロナ禍ということもあり、定期的ではないが、市町村とは適宜連絡を取り合っている。	日常的な報告・申請・人員不足の相談等で連絡を取り合ったり訪問し協力関係の構築に取り組んでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	全体会議で定期的に身体拘束適正化検討委員会を行っている。(年4回)身体拘束について正しい見解を職員間で共有できていると思う。また、日々の業務の中で話し合うこともある。	事業所全職員で3ヶ月に1回委員会を開催している。普段何気なく行っている介護について、身体拘束・虐待防止チェックシートを用いて施設内で行っている対応や声掛けの内容を振り返り、7つの虐待に抵触していないか、虐待に繋がりそうな事例は無いかなど、自己反省を促している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	全体会議で定期的に虐待防止についての研修会を行っている。虐待防止について正しい見解を職員間で共有できていると思う。また、日々の業務の中で話し合うこともある。		

グリーンライフヴィラ荒尾

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者はすでに学ぶ機会を経ているが、スタッフにも以降研修の機会を設ける計画を立てている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	納得していただくよう説明後にも質問を受け付ける時間を設けている。また随時相談を受けることも可能であり、納得が得られない場合契約破棄も可能である。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時など日頃の様子を伝え将来のことも踏まえ意見や要望を引き出すようにしている。必要時には家族会を開催している。普段の電話連絡の際にも、気軽に要望を受け入れる雰囲気づくりにも成功している。	面会受入れ等は法人による制限もまだあるが、感染対策を行いながらできるだけ家族と入居者が疎遠にならないよう支援している。今年度の目標の一つは「家族の絆を深める橋渡し人になる」ことであり、家族にとっても気軽に意見を表すことができる関係作りを行っている。	日頃の家族の関わりも大きく、特別なことだけではなく、日常的に電話連絡を行うことで意見を出しやすい関係作りを行っている様子がうかがえました。「共に支える」立場として家族との関わりが継続するよう期待しています。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	会議前には懸案事項など、スタッフの意見を引き出すようにし、会議の場だけでなく日頃からのコミュニケーションも大切にしている。ミーティングではどのような意見でも圧迫されることがない。	日頃より職員は管理者・主任に意見を表すことができる。毎月の職員会議は事前に職員からの意見を求め、共有が必要な事項は会議時に共有している。職員の意見は制限されることなく、必要に応じ法人への報告、検討もなされている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人での研修、勉強会の機会を提供し、職員各自が独自に技能習得、知識習得向上できるよう条件を整備している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人は、管理者、職員に対し、メンタルトレーニングを含んだ、自己啓発研修に力を入れている。研修は3月に1回のペースで開催されている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	他法人の参加する研修会などでは交流を深めることができたが、例年行われるグループホーム連絡会主催の勉強会はコロナ禍で開催できなかった。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	初期の段階で無理に関係作りを焦ってしまうと、かえって不信感を増強してしまうこともある。その為、自然な時間の流れと併せながらコミュニケーションをとり、不安や要望を引き出し、共感していく。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族にとって初期の段階では、大きな不安や疲労感を伴っていることが多い。まずは、家族の話全てを受け止め「聞く」姿勢を大事にしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居を決める段階で、本人や家族と面談し、本人が必要としている支援、提供できる支援を考慮した上で利用している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	お互いに一人の人間として尊重し合えるよう意識している。その為、スタッフは家庭内のことやプライベートなことなどを入居者に相談するという場面もみられる。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人を支えるために、家族の理解と協力はなくてはならないものと捉え、普段より連絡を取り合い、情報を共有しつつ「一緒に」支えていく構図を取れるよう意識している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ホームより入居者の馴染みの関係である知人の面会や、電話を積極的に依頼するようになっている。	コロナ禍が続いたため気軽な外出による関係支援は難しい状況も続いたが、以前から利用されている美容院への訪問や、家族協力による通院支援等を継続している。家族の関わりもよく見られ、入居者・家族と事業所の関係が希薄にならないよう取組んでいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士、人間関係においては一種の社会の縮図のようなものと考え、スタッフは無理に介入しないようにしているが、同時に怪我や事故などが発生しないよう配慮している。		

グリーンライフヴィラ荒尾

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス利用後も、継続的に電話連絡など行ったり、顔を出すようにしている。その為、サービス終了後も家族やその縁者から相談を受けたりすることもある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常的に要望、希望をリスニングするようにしている。また、本人からの発言で要望があった際には日誌などにそのまま記載し、スタッフ間で情報の共有を図っている。また、その内容は家族にもお伝えしている。	日頃から職員の寄り添いにより、言葉や態度等で思いや意向の把握を行っている。職員会議では「何かをしてもらう」だけに着目せず、ADLや会話等で個人を尊重した個別ケアを意識していることを共有した。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時にアセスメントシートである程度の情報を得ることができるが、入居後改めて本人や家族に入居前の生活や生活歴などを聞き、情報に深みを持たせていくようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりのADLをはじめ心身の状況に応じて日常生活の役割など支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	入居前より本人のケアのあり方について伺うようにしており、ホームでの暮らしに即した支援のあり方をケアプランに反映するようにしている。	入居後介護計画作成後は、毎月の職員会議で入居者それぞれの懸案事項を出し合い、入居者ごとの困りごとについて共有・検討している。日頃の家族の面会時や電話連絡時等には家族の意向も確認している。	介護計画作成・見直しは職員全体で入居者の状況を共有・検討し、介護計画作成者を中心になされていることが確認できました。日常的な家族の関わり・協力も見られますので、入居者情報がより共有されるよう担当者会議の家族への声掛けも検討されてみてはいかがでしょうか。
27		○個別の記録と実践への反映 日々様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日頃のかかわりや支援の中で、気づいたことや工夫があれば日誌に記入している。カンファレンスではその内容も含んだ話し合いが行われており、ケアプランに反映されている。また、会議などを通じて、職員間で精査している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	事業所の周知及び地域への認知症啓発の拠点としての機能を備えることを目的とした、地域参加型の勉強会などの開催も視野に入れている。		

グリーンライフヴィラ荒尾

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居後も継続してなじみの人との関わりを継続することが出来るよう、地域資源の把握と、発掘は常に意識している。今年度はコロナ禍ということもあり、積極的に取り組みはできていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	基本的に入居後も以前からのかかりつけの診察を受けることが出来るようにしている。しかし、通院介助は基本家族によるものとしている。	入居以前のかかりつけ医の継続した受診を支援している。現在は殆どの入居者がそれぞれのかかりつけ医からの往診を受けている。通院が必要な際には家族による介助を基本とするが、職員が付き添うこともある。隣接事業所の職員である看護師による体調確認もあり、相談もできる体制である。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職には日常の健康状態を見てもらいながら、必要な医療的アドバイスをもらうようにしている。必要であれば訪問看護利用や医療機関の看護職に相談するようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院などの案件が発生した場合、すぐに介護サマリーやアセスメント票を提示できるようにしている。また、関係作りや、情報交換のため、入院時も面会は欠かさず行うようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化やターミナルケアについての指針は入居時に書面で説明し、同意を頂くようにしている。また、家族の意思や考え方も変化していくものであるため、面会時などに状況説明し、指針に変更はないか随時確認するようにしている。	重度化や終末期に向けた方針と事業所の対応については入居時に本人・家族へ説明している。実際にその時が近づいた際には都度意向を確認し、希望される場合は看取りまで支援している。事業所の体制として、一人の「人」として最期まで関わるコミュニケーションが大切とした支援を行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	現在、救急救命における研修や勉強会に参加している実績は薄く、スタッフ個々の経験値や技術によるものが大きい。救急マニュアルや、訓練等の必要性を感じている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域との消防団とは合同で入居者の避難誘導まで行ない、職員と協同して災害時に備えている。今年度はコロナ禍ということもあり、合同訓練は実行できていない。	年2回の火災避難訓練を行っている。火事を出さないことが何より大切として日頃から配慮している。	

グリーンライフヴィラ荒尾

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉、口調だけでなく、その表情や声のトーンまで気かけながら、支援者の感情のあり方も意識して取り組んでいる。また、月間目標などで定期的に挙げていくことで意識を高めることもある。	一人ひとりの尊重とプライバシーに関する配慮や対応について職員会議で話す機会を持っている。会議や打合せ時、例えば排泄の話をする際にはイニシャル・専門用語を使う等の配慮を行っている。日頃から入居者一人ひとり個人を尊重した個別ケアを意識している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	基本的に物事を問う再いくつか選択肢を用意し、選択していただくようにしている。(メニュー等)問かけに対しての返事が無い時は、表情や動き出しの有無などで、本人の意志を理解しようと努力している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	決まりごとは極力作らないようにし、日々で変化する、入居者の気分や体調に沿って柔軟に対応できるようにしている。生活においての希望は日常的に聞くようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	家族の協力の元、本人の好みの衣類や化粧品などを身につけることが出来るよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の好みや、本日のメニューなど、ゆったりしている時間などを利用してゆっくり聞き出している。食材の買出しや、準備、片付け、役割や楽しみを持ちながら、自然に生活リハビリとして取り入れることに成功している。	事業所で職員手作りの食事を提供している。できる範囲ではあるが、皮むき等、下拵えも参加して頂いている。調理時には食事に関する話題もあり、音・匂いも入居者にとって大切なものとしている。小柄な入居者には体にあつた椅子テーブルを準備している。食事中にもビニールエプロンを表に出さない配慮がある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事は野菜を中心に、入居者の食べやすい量と形状を考慮し提供している。必要に応じて栄養補助食品も利用している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自歯や義歯などの状態を定期的に確認している。毎食後の口腔ケアについては一部の入居者に実施提供している。		

グリーンライフヴィラ荒尾

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	介助が必要な方であってもなるべくトイレでの排泄を支援している。また、オムツ対応にする場合も全体会議で慎重に協議し、移行するようにしている。	入居者の仕草等で職員から声を掛け、できるだけトイレでの排泄を支援している。入居者の体調変化や体力低下でパットの使用や大きさ変更が必要となる際には話し合いを重ね、費用負担にも配慮している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎朝必ず発行乳製品を提供するようにしている。また、主食には雑穀を混ぜ、副食は野菜中心としている。消化能力の低下している入居者にはその形状も消化しやすいよう工夫している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は2日に一度のペースで入れるようにしている。また、希望があれば毎日の入浴も可能である。	一日おきの入浴を基本としており、希望があれば毎日でも入浴できる。入居者の介護度等により二人介助が必要な場面もあるが、できるだけ湯舟を利用し気持ちよく過ごして頂けるよう支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	休憩において、時間などを設けているわけではないため、入居者は思い思いの時間に好きな場所で休憩することが出来るよう、共有スペースのみならず、プライベートスペースの室温も配慮している。また、1人になれるスペースも確保している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	医療機関に相談しながら必要最低限のものになるよう配慮している。そのため、受診往診時には、直近の情報をまとめて文書で情報提供している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居後は家事活動などになるべく楽しみながら参加していただけるよう支援し、本人の残存能力保持を目指している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ対策もあり、敷地内の散歩程度はよくある。少しずつではあるが、状況を見て、季節の花見など外出する機会が持てるようになってきた。	コロナ禍であった数年、その日の希望にそった気軽な外出支援は難しい状況であった。今年度は季節の花見や家族協力による一時帰宅等、すこずつ再開している。季節の寒暖を感じることも大切であるとし、日常的な散歩や外気を感じる支援を行っている。	

グリーンライフヴィラ荒尾

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭トラブルなどのリスクが高いため、当事業所では基本的に事業所預かりとなっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	離れている家族や知人に会えるよう支援したり、電話できるように支援している。個人で携帯電話を持ち込み、利用されている入居者も居る。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	家庭的な雰囲気を維持するため、プライベートスペースには基本的に何でも個人のものを持ち込めるようになっている。また、過剰な光の刺激や音の刺激がないよう、常にカーテンで調光したり、TVのボリューム調節など行っている。	食卓もある食堂・居間では時には職員と一緒に食事作りをする姿やソファでテレビを見る姿、職員と体操をする姿等、思い思いに過ごす様子が見られる。廊下・居室には安全に配慮した手作りの手すりも備えられ、自由に行き来する姿も見られる。入居者の生活は自由で制限されることなく、穏やかに過ごすことができる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居室や共有スペースで、気の合う入居者同士で過ごせるよう支援している。また、ホーム内随所に一人になれるように椅子を設置している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居者のアルバムや寝具、調度品など使い慣れたものを使用していただくようにしている。仏壇などを持ち込み、以前より信仰のある宗教を継続していけるような配慮もなされている。	入居時に使い慣れた生活用品の持ち込みを依頼している。家族写真や仏壇等の持ち込みもある。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自作の簡易式手すりなど設置し、自立支援を意識した環境作りを工夫している。		

2 目 標 達 成 計 画

事業所名 グリーンライフヴィラ
 作成日 令和 6年 1月15日

【目標達成計画】

優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目 標	目標達成に向けた具体的な取り組み内容	目標達成に要する期間
1	26	介護計画作成・見直しについて、職員間共有のみであり閉鎖的である。	カンファレンスに家族の積極的な介入を促す。	職員に疑似的な担当制を設け、カンファレンス開催などを主として行ってもらう。その際、家族への参加を必ず促すようにしていく。	2年
2	10	普段から家族とのかかわりの継続	スタッフ全員が、日常的に家族とのかかわりを強化、継続していくことで「共に支える」関係づくりを行っていく	職員に疑似的な担当制を設け、些細なことでも定期的に電話連絡するようにしていく。良い連絡も、悪い連絡も素早く行い、経過や結果も間違いなく報告していく。	1年
3					
4					
5					

注1) 項目番号欄には、自己評価項目の番号を記入すること。

注2) 項目数が足りない場合は、行を追加すること。